

ふるさと霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第120号 (2016年5月)

風に吹かれて (98)

白井啓治

・里山の風に吹いてみる はるばる歩いて十年

今月号で、ふるさと風も120号を刊行することが出来た。120号、十年。大げさな数字ではないが、小会にしては遙々歩いて来たものだと思う。

十年間、一度も欠かさず毎月書き続けた打田昇三兄、兼平智恵子姉、小林幸枝妹には称賛の言葉をささげたい。

伊東弓子さんは2号から参加され来月号で10年120号。菅原茂美さんは19号から参加され、この3月で100回の投稿を達成された。木村進さんは79号からの参加。そして、にわやまゆみこさんは119号からのほやほやニューフェイスで、これからのふるさと風を牽引して頂く期待の青年である。

この会報を始める時に、自分の考えや思いを表現する文章に、上手下手などの詰まらぬ尺度を当てるなど話した。また、こんなことを書いたら何か言われるのでは、思われるのでは、という卑猥で姑息な利口ぶった感覚を捨てること、と言ってきた。そして、誰かに何かを言われたら、何かを言われるほど読んでもらえて有難うと感謝しようとして来た。10年を迎えてみると、ようやくそうした感覚が身についてきたように思う。

自分たちの思いや考えを、ふるさと風として自由に自在に表現、主張していく。そのことがふるさとの歴史・文化を再発見し、新しく創造していくことに繋がり、暮らしの物語を降らせることになるだろうと思う。

また、十年の継続は、会員のふるさとに対する強い思いと同時に、読者という形で応援下さった方たちの力でもある。改めてここにお礼申し上げます。

昨年は、敗戦70周年を迎えたのであったが、今年、立憲主義に基づいた現憲法が公布されて70年を迎える。人生では70歳を迎えると古稀と呼ばれ、御祝いも受けるが老害呼ばわりもされるようになる。しかし、敗戦を経験し二度と戦争はしないとの切実な願いによって誕生した戦争の放棄の条文は古稀にも老害にも当て嵌めることのできない、世界で唯一の誇るべき条文であり、人類普遍の真理である。

5月3日は、立憲主義に基づく憲法を祝す記念日である。国会では現政府が不穏な改憲ムードを恣意的に高めようと躍起になっている。

なぜ憲法の改正なのかを考える時、憲法の意味するものを改めて考えてみる必要がある。憲法とは、国民が守るべきことを示しているの

はなく、為政者が守らなければいけないことを定めた法を言うものである。多くの人が、この事を忘れてゐるか、知らなかったかで傍観を決め込んでゐると言える。

傍観という無知が、「戦争は自衛隊がするのでしょ」の言葉で返って来る。

憲法記念日にあたり、憲法とは、国民が首相・大臣・国会議員などの為政者に、守らなければならない約束事を定めたものであることを、改めて考えてみる必要があるだろう。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会は、今5月号で丸十年を迎えました。当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

はじめに

「ふるさと『風』」はお読み頂く皆様のお蔭で創刊から十年を迎えることが出来ました。先ずは有難く御礼を申し上げます。会員が手作りで始めた正に名も無き小紙ですが表題に有りますようにふるさと石岡に吹く微風として「人知れず其処に在る」ことを目指しております。

主宰の白井啓治氏は文章のプロですが、他の会員は其の指導を受けて文章を書くことに興味を持った者たちです。「文は人なり」と言いますから自由に書けば良いのですが、書いたものは他の方々に読まれる、という条件があります。つまり最小限の心掛けとして「読者に分かって頂く」とが必要であろう…と肝に銘じてはいるのですが中々に難しい：是までに勝手なことを書き並べたことを深くお詫び申し上げますとともに引き続きお読み頂きますようお願い申し上げます。

古代官職余話

日本に天皇制が続いてきた理由の有力な説に「天皇不親政論」があると聞いた。天皇の名の下に行われた政治も、実際には「藤原、平、源、北条、足利、織田、豊臣、徳川ら」が実権を握っていたので政治責任は天皇に負わされなかったということらしい。その論理を明治以降に当て嵌めると豊臣、徳川らに相当するのが軍閥であろうか、名義人であっても責任を免れるとなれば、借金のある者には実に嬉しい話なのだが…

日本では古来から官職を「つかさ」と呼んだように「高い所に居て朝廷をつかさどる」というこ

とらしい。「つかさどる」とは「役目として担当する」「支配する」「統率する」…支配だけして後は知らない振りをする政治家や官僚などが居ては庶民が困るけれども…「古代職制」と呼ばれる往時の官制が定められたのは、藤原京時代・文武天皇治世（七〇一）の大寶律令に依る。それが具体的にされたのは平安時代らしい。

それら官僚は文官と武官とに分けられ、さらに都で勤務する京官と地方官（外官）に区分されていた。地方官も国家公務員で、その中の管理職に相当する者は「四部官制」と言って次に示す四段階の区分があり、同じ区分の職でも役所（職務）ごとに位階・封禄・身分などが違っていた。

①「長官」は「かみ」と呼ばれて、それぞれの役所の統率に当る。

②「次官」は「すけ」と言って、長官を補佐する。

③「判官」は「じょう」で役所内の監察と書類の審査及び不備の是正に当った。

④「主典」は「さかん」で、登録事務や書類の作成、公文書の取扱いを任務とした。

四部官の下で働く一般職員は「史部（ふひとべ）」などと呼ばれていたが、それも一部の者が選抜されていたようなので「その他大勢」にも入れて貰えなかった公務員が居たのかも…

四部官制に依る主な職名は次のとおりである。

○長官—太政官では各大臣、各省では卿（けい）、寮などでは頭（かみ）、近衛府では大将、鎮守府では將軍、太宰府では帥（そつ）、諸国国司は守（かみ）、その他は長官など

○次官—太政官では大納言と中納言、各省では輔（すけ）、各寮などは助（すけ）、近衛府では中将・少将、鎮守府では將軍、太宰

府では貳（に）、諸国国府では介（すけ）、権介（ごんのすけ）、その他は次官など
○判官—太政官では辨（べん）と少納言、各省では丞（じょう）、各寮などは允（いん）、近衛府は將監（しょうげん）、衛門府・兵衛府・檢非違使は尉（じょう）に当たり、鎮守府では軍監が是に相当し、諸国国府の掾（じょう）が判官職になる。ただし国府の掾は国別に大掾、権大掾、少掾、権少掾などに区分されていた。

○主典—太政官では外記（げき）、近衛府の將曹、鎮守府の軍曹、諸国国府は目（もく）である。石岡には「小目代」の地名が残るが、学者の説によれば「目代」は国守が私的に置いたものとしている。

四部官制など平安時代に用いられていた諸制度は平家滅亡後に源頼朝が鎌倉幕府を開き、武家政治を始めたことにより有名無実化してしまった。頼朝は摂政関白などが用いていた「家」の統制の為の制度を参考にしながら必要に応じて鎌倉幕府の制度を拡充したようで、將軍を中心にして「執権」「連署」「政所（まんどころ）」「侍所（さむらいどころ）」や奉行制度を取り入れた。

更に地方には「国守」の他に「守護」を置き、其の管轄下に「地頭」が置かれた。是により平安時代に作られた国府の機能は宙に浮き、国府所在地も寂びれてしまった。常陸国の国府として奈良・京都に劣らない繁栄をしていた府中（石岡）の町も此の頃から衰退が始まったと思われる。

源頼朝が此の制度を取り入れたのは弟の義経が自分に逆らって日本国中を逃げ回ったので、何とかして是を捕らえようとする個人的な憎しみから

である。そのお蔭で国司に仕える「掾（じょう）」の職も鎌倉時代には名目だけになってしまった。

道府県の制度が出来るまでの日本は、時代によって若干の変更は有ったらしいが俗に「六十余州（国）」と言われており、国土面積、人口などに依って次のように区分されていた。

○大国―大和、河内、伊勢、武蔵、上総、下総、常陸、近江、上野、陸奥、越前、播磨、肥後の十三か国

○上国―山城、摂津、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、相模、美濃、信濃、下野、出羽、加賀、越中、越後、丹波、但馬、因幡、伯耆、出雲、美作、備前、備中、備後、安芸、周防、紀伊、阿波、讃岐、伊豫、筑前、筑後、肥前、豊前、豊後の三十五か国、なお東北地方は大国の陸奥と上国の出羽とに二分されただけである。

○中国―安房、若狭、能登、佐渡、丹後、石見、長門、土佐、日向、大隅、薩摩の十一か国で佐渡が島が一国扱いになっている。

○下国―表現が適切では無くて「小国」と言うべきだが和泉、伊賀、志摩、伊豆、飛騨、隠岐、淡路、宍粟、対馬の九か国、

当然ながら配置される職員は差があり「中国」が基準どおりで「下国」には次官の「介」が置かれず、上国以上には「権守（ごんのかみ）」「権（ごんのすけ）」「権掾（ごんのじょう）」が付く。さらに大国になると、「掾」の職が「大掾」「権大掾」「少掾」「権少掾」に分けられる。常陸国は大国であるから「大掾」が置かれ、桓武平氏として筑波山麓などに残った一族が其の職を世襲する形で姓としていたのである。これら地方職員の勤務状況

を査察する目的から定期または不定期に中央から巡察使などが派遣されたようである。

さらに大国十三か国のうち「上総、常陸、上野」三か国の国守には「親王」が任命された。是は桓武天皇の子であった淳和天皇の時代に、何が原因か分からないがやたらと皇族が増えて皇室経済が困窮したので其の費用に充てるため「親王任国」として三か国を指定したからである。後には後醍醐天皇まで余計な真似をして陸奥国も親王任国にした。此の制度により親王任国は治外法権のような状態になってしまった。

つまり国守は都に居て貰うものだけ貰う。次官の「介」も横着をして現地に来ないことが多い。そうすると三番目の大掾職が国守並の権力・財力を持つことになる。其の代表的人物が「宇治拾遺物語」に出てくる「多氣の大夫（多氣大掾）平維幹」であり、財力にものを言わせて歌人・伊勢大輔の娘を都から拉致してきた。

平維幹は現在の筑波研究学園北端に在った水守館（みもりやかた）に居てから筑波連山の多氣に居を移し、其の子孫は…為幹―繁幹―致幹―直幹―義幹と続いた。致幹（むねもと）の代に、其の娘と源頼義（八幡太郎義家の父）との間に生まれた女子が奥州平泉の清原家に嫁ぐ婚礼の際に、清原家の重臣・吉彦秀武（きびこのひでたけ）が祝の品として多くの砂金を持って来た。此の時に当主の清原真衡は客の僧侶と碁を打っていて秀武に気付かず、重い砂金を捧げた俵で放って置かれた秀武は堪忍袋の緒を切らして砂金を庭に撒き散らして（勿体ない）屋敷に戻り反乱の兵を挙げた。是が発端で起きたのが「後三年の役」である。

致幹の孫・義幹の代に大掾氏の本流は滅びる。

源氏の世になったから平家本流が消えても仕方が無いが、義幹の妻は源頼朝の腹心・狩野氏の出であるから上手く立ち回れば存続できたのだが：多分、多氣大掾は筑波山麓に領地を貰った小田氏の策謀で、曾我兄弟の仇討事件にかこつけて潰されたのであろう。大掾家は潰されても当主の身柄は狩野氏に預けられていて、其の娘が水戸に居た大掾支流の馬場資幹を夫とした。資幹は大掾本流を継ぎ源頼朝に仕えた。後に府中（石岡）に進出して来るのである。つまり、馬場系大掾氏が水戸と石岡を手に入れて常磐線沿線を支配していた。

南北朝時代から室町時代に入ると「世の中一寸先は闇」の諺どおり「難台山事件」とか「上杉禪秀の乱」などで対応を間違えた大掾氏は、僅かに府中（石岡）城に依るだけの弱小勢力になってしまった。此の時に大掾氏と対立していた東北の佐竹氏から養子の話が有ったのだが大掾の重臣たちが拒否をして一族に跡目を継がせた。養子候補に挙げた人物は佐竹一門の名君となり、身内からの養子に拘った大掾氏は、それから没落への道を辿り、父祖の栄光も忘れられてしまうのである。

天正十八年、小田原の北条氏を潰した豊臣秀吉は関東地方を徳川家康に任せて、東北地方の制覇に興味を持った。東北地方には「金」が出たからであろう。かつて其の国府が京の都にも劣らないほどに繁栄していた常陸国も北部に居た佐竹氏が秀吉から「好きにしろ！」と言われて其の通りにしたから石岡に残っていた名門大掾氏も消えた。

佐竹氏は儲かったのだが関ヶ原合戦の対応で失敗した為に秋田地方へ飛ばされ水戸を中心として常陸国は徳川親藩が領有することになる。それも「参勤交代」を伴わない藩主江戸詰めの藩であ

るから其の分、地元は寂れても仕方がない。石岡が村にならず、「市」で残っただけ良かった。

「破壊の神様」

菅原茂美

近代文明をつらつら見るに、創造・発展には、力を入れるが、不要物の処分・破壊を、ないがしろにするから膿が溜り、制度疲労が重なって社会が乱れる。人体も社会も新陳代謝の「入力と排出」のバランスが、適切でないと、健全を保てない。綺麗さっぱり、清々しく生きたいなら「破壊」を手抜きしてはならない。

*

ヒンドウ教には「破壊の神様」が鎮座します。その名を「シヴァ神」と言う。

そもそもヒンドウ教とは、現在、キリスト教・イスラム教に次いで世界第3位9億人を占める。その内、インドには8・3億人もいるが、国教ではない。ヒンドウ教はBC1300年頃、イランなどからインドに侵入してきたアーリア人の「バラモン教(司祭階級)」から、經典を引き継ぎ、土着の神々を吸収して創られた「多神教」である。さて、シヴァ神とは、ヒンドウ教の三神一体論をなすもので、①創造神「ブラフマー」②維持神「ヴィーシュヌ」③破壊神「シヴァ」の3柱からなり、最後を締めくくる一神である。いかにも、インドらしい「輪廻」思想の深みを増す。

シヴァ神の乗り物は「ナンディン」と呼ばれる「牛」である。そのためインドでは、牛も神格化され、崇拝される。シヴァ神には3個の目がある。

その逸話は、彼の妻「パールヴァティ」が、夫(数百人の女性を侍る)が、かまってくれないので、彼の両眼を塞いだところ、たちまち世界が闇に包まれた。するとシヴァ神の額に第3の目が現れ、そこから炎が噴き出し、ヒマラヤの山々を焼き尽くし、世界を再び明るくしたという。

シヴァ神にはマハカーラ(天いなる暗愚)という異名もある。それが漢訳仏典では「大黒」と意識された。更に邦訳の際、出雲の神話では、「大国主命」の「大国」がダイコクと読めるので、七福神の一神「大黒天」となり、略して「大黒」となる。大きな袋を負い、打ち出の小槌を持ち、米俵を踏まえ、台所などに祀られる福の神となる。

大黒様のルーツは、インド・ヒンドウ教の破壊の神「シヴァ神」である。以上は、ネット情報をアレンジしたもののだが、何やら世の中は、要らざるものが多過ぎはしませんか？というも思う。

* * *

私は、これまで「偽の文明」という言葉を度々用いてきた。文明が「にせ」とは何を言うのか。それは、真の文明なら、個人や社会が、己の、つかの間の便利のために、環境破壊や他の生物を絶滅に追い遣るような、非道は行わないはず。

「現在の地球は、未来の子孫からの預かりもの」という、高邁な思想がある。現在地球上に寄生している「人類」というパラサイトは、後先を考えない。今の今、自分や自分の国家だけが生き残ればそれで良い。世界の資源が将来どうなるうとも、今、自分達が生きている間だけ何とかなればそれで良い。国の梶を取る今時の首脳・宰相達には、高邁な精神などまるで欠けている。国連憲章など単なる飾りもの。各国首脳はまず己の国益

が第一。醜いエゴ世界だ。そんな文明を「偽物」と言わず、何と呼ぶ？それを改めなければ、真の文明は繁栄しないと考える。

中国は13億人も人口があるのなら、比率から言って、もっと多くの賢人が現れ、全世界に貢献してもよさそうなもの。一党独裁で言論の自由を封じ、人権を無視した超時代遅れの国家体制を改め、国民を啓蒙する識者が現れて良さそうなもの。ノーベル平和賞のシュバイツァー(1952年、マザー・テレサ(1979年)、17歳のマララ・ユスフザイ(2014年)などは、命を的に、恵まれない人々のために歴史的貢献を果たした。中国は経済ではなく、世界への貢献者数で、一等国になってほしい。

そもそも、2010年ノーベル平和賞の劉曉波を監禁している政府は、犯罪人を表彰するノーベル賞など、ろくなもんじやない。として罵倒した。そしてその代わりに、「孔子賞」を設け、世界の失笑を買った。近い将来、ろくな根拠を持たずに、南京事件の中国人犠牲者を、数百万人と報道した日本人記者を、孔子賞に推薦するとか噂がある。

* * *

さて大幅に脱線したが、現代文明を「偽の文明」と私が言いたい根拠は、現生人類が、「生命の惑星地球」を、不毛の砂漠に陥れるような愚かな行為が、あまりにも目立つからである。時代が進めば進むほど、その現象が露骨に表れてくる。偽の文明は、あまり巨大化する前に、修正または破壊して、正道を歩むべきである。

現在、地球上の全ての生物は、40億年前、浅い海の底で誕生した、ただ一個の「原始生命」に起源を持つ。それは、全ての生物が核酸(DNA&RN

△という遺伝子による設計図を持ち、「新陳代謝と生殖」という基本活動をする様子から推測できる。生き物全てが皆兄弟。それゆえ、全ての生物は、同胞であり、まして、万物の霊長と自らを讃えたいのならば、もっと広い視野を持つて、全生物が、平等に生きていける環境を整えてやる事が、この星のリーダーの為すべき事。

緑が消え、砂漠が増えている。化石燃料の消費増が主体ではあるが、焼き畑農業や森林伐採は地球温暖化を加速する。高地や極地の氷河が解け、異常気象をもたらし、海水面が上昇し、気象難民を生み出している。毎年8500万人ずつも地球人口が増えているというのに、海の幸に恵まれた居住低地は、海の底に沈んでいく。ゲリラ豪雨で山や崖が崩れ、土石流で人家・人命が失われていく。天災を人災が後押ししている。

温暖化はそれどころではなく、最も恐ろしいのは、マラリア・デング熱・そして近年、中南米に流行り出したジカ熱など。現在の熱帯病は、中緯度地帯にジワジワ進出してきている。中緯度地帯は人口密度も高く、何より熱帯病に対する免疫保持率が非常に低い。一気に流行ししたら、手の施しようがなくなる。日頃バカにしている「蚊」に根の浅い文明が崩れていく。熱帯の毒虫・毒蛇が銀座をウヨウヨ。熱帯に滞在した経験を持つ私が最も怖いのは、熱帯の感染症と有毒害虫等々。私はアメルバ赤痢に感染し、3日で7kgも痩せ、死線をさまよった経験がある。身近に迫る温暖化の恐怖。早急に払い除けなければならぬ。

* * *

愚かな文明・利那主義の文明の発展により、他の動植物の繁栄を奪うどころか、人間同士の果て

しなき殺し合い。社会が進めば必ず貧富の差が生じ、争いが絶えない。いかほど世が進もうとも、この厄病神はついて回る。人間が心の安寧を願って生み出した「宗教」が、信じる神が違うとかで、隣人同士がいがみ合い、殺戮の応酬にしのぎを削る。それを無くするために作られたであろう、「国連」とやらは、格好つけて「非難声明」とやらを発表するだけで、現場改善に何の効果もない。人類は700万年かけて大脳を3倍に増やしたが、同胞仲良く、末永く安寧に暮らす機能の構築には、さっぱり役立たず。いかに近代化が進み、科学が発展し、難病対策が進んでも、基本的には、「ヒト」という動物は、我慾が強く、己の「利」のみを追求するエゴの塊と見える。

更に最も愚かな行為は、武器の発達。大量破壊兵器の開発競争。全人類を何度も殺せる量の「原水爆」貯蔵合戦（15年・全世界で15850発。核保有で何が大国だ。大国ほど愚か者の数も多いという事か。それを見て、ヨチヨチ後から真似をし、国民がろくにメシも食えないのに、危険なオモチャを持ちたくて、超背伸びをするアンボンタン国家。首領だけが丸々太り、国民は餓死状対。

焦って、先進国の仲間入りをしたい発展途上国が、国民の呼吸が苦しくなるほどに大気を汚染し、50歳先が見えないほどの国もある。

世界のどこかで必ずドタンバッタン。明けても暮れても争いが絶えない。人類が大脳を膨らまして得たマイナスの遺産「限りなき武器の強化」。なすけなや。人殺し・皆殺しの道具の工夫改良。武器を制する者が世界の王者…みたいな錯覚で、世は武力拡大競争に明け暮れ。国民が飢えようが寒かろうが、ただひたすらに軍備拡大競争。

どこにでも必ず悪者はいたであろうから、武器はせいぜい竹槍程度。火器、更には重火器まで進化する必要はなかった。文明の発展は、もっと、スローペースでよかった。人類は焦り過ぎた。

兄貴分のネアンデルタール人の種の寿命は27万年で尽きた。サピエンスも兄貴同様の寿命と仮定したら、残り後7万年しかない。調子込んで、ろくでもない文明を加速したら、後1万年…という専門家もいる。人類は、あまりにも自分の首を、自分で締める愚かな行動が多いので、未来学者もバラ色の絵を描けないであろう。

焦って築いた近代文明とは見て御覧のとおり。水や空気を汚し、温暖化を招き、高山から海底まで進出し、至る所をほじくりまわし、地下や地上に至る所に構築物を林立させる。巨大なアリ塚のビル。モグラに啗られそうな地下街。水銀やカドミウムなど毒物を撒き散らし、他の生物どころか、自分達の子孫さえ生存が怪しくなるような愚劣な行為を、人類は何度も繰り返してきた。

交通機関は何もかも高速化する。そのために動植物は抹殺され、種の存続さえ奪われるものが続出。そして愚かにも自らの高速をセーブできず、激突・転覆などを何度も繰り返す。車・船・列車・航空機。速く動くものは必ず大きな事故を起こす。

ビルは、なぜあんなに高層化するのか。世界は競って天を目指す。そもそも地球の表面は、薄皮饅頭のほんの薄い皮が、内部の煮えたぎるマグマの上に軽く乗っかっている事を忘れている。饅頭の餡子が暴れれば、表面はデコボコ・陥没・吹き出し・波打つのは、分かり切っているはず。しかも日本は、ご存じ火山列島。いつも波打つ地殻の上だ。軽薄な砂上の楼閣でも、それをより高く盛

り上げて覇権を競いたいらしい。

マグニチュード9ぐらいの地震の最中に、風速80^{km/h}(過去教回記録あり)の台風でダブルパンチ。あり得ない話ではない。自ら招いた温暖化により、この程度の爆弾低気圧は、今後いつどこでも、何度でも起こり得る。

鉄の強度はどこまで信用できるのか。まして、コンクリートという脆い工法が、いつの世まで幅を利かすというのか。築100年も持たないコンクリートジャングルを、文明の建築物と言えるのか。炭素繊維ならまだまし。値が高くてできないと言うなら人命第一で、それなりの高さに制限するのも人の智慧というもの。いつその事、築1300年、世界最古の木造建築・法隆寺の五重塔を見習い、ビルは木造で3階まで……でも法律を改正すれば、景観を損なわず、世界の尊敬を集めはしませんか……と言いたい。人口増に耐えきれないと言うなら、大都市への人口集中を早速止める事だ。

* * *

悪口を言うのも疲れ果てた。しかし、もう一言。

この2月、台湾の16階ビルがわずかマグニチュード6・4の地震で崩壊した。壁のコンクリートの中には、油の空き缶がどっさり入っている。空き缶の中に金塊でもたっぷり入っていたなら、再建資金にでもなるうが、ただの空き缶とはね。開いた口が塞がらぬ。欲で固まった人間の浅智慧。日本にも似たり寄つたりの大企業がありましたね。

こんな話は世界中に充ち溢れている。特にインフラの建設ラッシュの後には、必ずこんな話が付きまとう。何事も最後が大事。老朽建築の後始末や利活用は、誠心誠意重大事。又、公共性の大きい建物ほどアフターケアが大切。

今、地球を取り巻く天空には、各国が競った人工衛星などの残骸が、正に数えきれないほど多数猛烈なスピードで飛び交っている。国際宇宙ステーションに、そんな断片が衝突してきたなら、重大な事故につながる。これから衛星を打ち上げる国は、まずこの残骸処理の後からにすべきだ。後片付け、その後に建設ありき……だ。

そして私がいつも思うのは、以前にも書いたが、電波の垂れ流し。つまらぬSF的被害妄想と嗤うなけれ。わが天の川銀河には2000億個の恒星があり、そのうち「知的生命」が存在しうる惑星は、100万個はあると推定されている。太陽系外惑星は、既に10000個以上も観測され、更に太陽と地球のような関係で距離・質量・年数・水や空気がありそうな地球型岩石惑星は50個も観測されている。その惑星に地球より数億年も先に生命が誕生し、それなりに文明が進んでいるエイリアンがいたとしても、決して飛躍した妄想ではない。そしてもし、彼等に侵略などの悪意があつたら、地球からの電波は、こちらの存在を丸々露呈するようなもの。攻めてくる道案内をするようなもの。勿論系外惑星からの電波・UFOなど、この地球に今、全く届いてはいないが、要注意だ。

最も太陽に近い恒星はケンタウルス座のアルファ星で4・3光年である。輸送船のUFOなど、やつてこられるわけもない。光速は音速の90万倍であるから、UFOのスピードを仮にマッハ10と仮定しても(コンコルドはマッハ2、ケンタウルスまで片道9万×4・3万年)ほぼ40万年かかる。最も近い星からさえ、宇宙人が攻めてこれない理由は、いくら遠征の飛行中を凍結睡眠に切り替えたい自動運転でも、知的生命体が往復・滞在合わせ

て100万年もかけて、遠征を乗りきれますか？

それゆえ、例え攻めてこないにしても、知的生命は、地球人みたいに自分の存在を漏らす電波の垂れ流しなどの「ヘマ」を犯すわけがない。ゆえに地球人の電波は、成層圏から外には出さない等の工夫が必要。便利に使つたものは、後片付けが重要。

人類は進化の最後の方で、急速に大脳を膨らまし、創造→工夫改善を加え、産業革命も越し、大幅に生活は改善された。感染症も大方克服。社会インフラも充実。一部を除き衣食住も安定し偉大なる文明を築いた。一部独裁政治による窮屈な国家も存在するが、大方は自由を謳歌し、人民が主体の民主主義もかなり定着しつつある。

しかし、物事は発展が急速過ぎると、乗り遅れ・落ちこぼれも生じ、アンバランスを生む。また、宗教や文明の差による衝突も生じる。物質文明には多大なる「ゴミ」も生じ、放射能など産業廃棄物が生存の根拠さえ危うくする。社会システムには、制度疲労やら、競争原理の圧迫からくる精神を蝕む病理が蔓延する。過労死・自殺・いじめなど未熟社会を襲う悲惨な現象もある。人類に智慧があるなら、これらの問題を綺麗さっぱりと片付けなければならぬ。間違つたものや、不用品は破壊し、禍根を残さぬ工夫が必要である。

* * *

夜には満天の星空。しかし星は見えないが、星はあるはず。地球の裏側を考えたら4分の1だ。

宇宙は138億年前、ビックバンにより誕生した。以来約1500億個の銀河は、未知の力(暗黒エネルギー)により無限の膨張を続けている。しかし膨張の果ては、いつかは縮小に転ずる可能性大。縮小の究極はビックバンの出発点に戻り「ビックク

ランチ」を起こして、また「無」の世界に帰るかも。この辺も、インドの輪廻思想にぴったりである。破壊の神の面目躍如。

地域に眠る埋もれた歴史（14） 木村 進

潮来と延方（二）

潮来市の少し北側にある延方の地には水戸藩の郷校「延方郷校」があった。その地を見て回ると天狗党の悲惨な歴史も見えてきた。前回に続いてこの地方の史跡などを見てみたい。

○ 潮来郷校跡

潮来市延方にあったという郷校の跡を追いかけてみたが、やはりあまりその姿は見えてこなかった。延方郷校跡の碑がある内田山（現在の潮来高校のあるところ）を見てのついでに、別なところを歩きまわっているともう一つ郷校跡と書かれた場所があった。潮来市役所の少し手前の潮来第一中学校入口近くです。中学校は高台の上でありその隣には潮来の祭りで知られた素鷲熊野神社がある。その中学校への上り坂の途中に「潮来郷校跡 潮来天王台下」と書かれた看板が立てられている。延方ではなく潮来郷校と書かれている。また潮来天王台下とありますが、この場所から階段があり素鷲熊野神社境内に続いています。明治10年に二つの神社が合併するまで素鷲神社と熊野神社と別々の神社であり、素鷲神社は牛頭天王を祀る天王社（天王宮）であったためだと思います。横には「安政4

年（1857）1月 武館開館 安政4年9月 文館開館」と書かれています。恐らくこの場所に武館と文館が建てられたのでしょう。呼び名もの潮来郷校と呼ばれ、延方郷校とは違った扱いのようです。延方郷校が始まったのが1807年です。そしてその内田山に現在二十三夜尊のあるところに移された「孔子聖堂」が造られたのが1820年です。この潮来郷校は幕末に近い頃です。水戸藩の郷校を調べてみました。

（水戸弘道館の教育を広めるために各地に建設された。弘道館には文館・武館・医学館・天文館などがあった。）

- ・ 稽医館（小川郷校）…文化1 茨城郡小川村
- ・ 延方学校（延方郷校）…文化3 行方郡延方村
- ・ 敬業館（湊郷校）…天保6 那珂郡湊村
- ・ 益習館（太田郷校）…天保8 久慈郡太田村
- ・ 暇修館（大久保郷校）…天保10 多賀郡大久保村
- ・ 時雍館（野口郷校）…嘉永3 那珂郡野口村
- ・ 大子郷校 安政2～4 久慈郡大子村
- ・ 小管郷校 安政2～4 久慈郡小管村
- ・ 小宮郷校 安政2～4 那珂郡大宮村
- ・ 町田郷校 安政2～4 久慈郡町田村
- ・ 秋葉郷校 安政2～4 茨城郡秋葉村
- ・ 鳥羽田郷校 安政2～4 茨城郡鳥羽田村
- ・ 玉造郷校 安政2～4 行方郡玉造村
- ・ 潮来郷校 安政2～4 行方郡潮来村
- ・ 馬頭郷校 安政2～4 下野国那須郡馬頭村

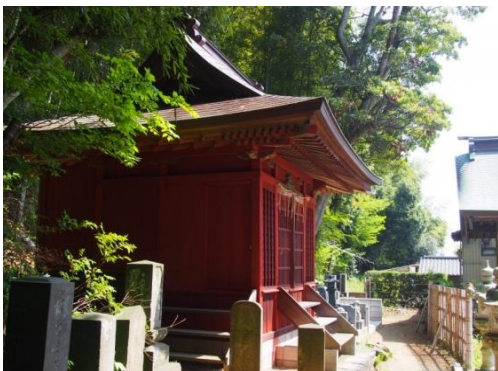
またこの潮来郷校に関係する人物を調べていたら林五郎三郎（正徳 1832～1864 幕末の武士）の名前があった。天保3年生まれ。常陸水戸藩士。弘道館舎長、潮来郷校掛などをつとめる。天狗党の乱に呼応し、潮来勢をひきいて松平頼徳

軍を支援、元治元年9月19日戦死した。33歳。

この郷校などを追いかけると必ず天狗党に行きあたります。そして悲惨な最期を遂げた話を思い出しこれ以上話は進めなくなります。この潮来郷校跡のすぐ近くの国道51号線沿いに「恵雲寺」（えうんじ）という日蓮宗の寺があります。寛政9年（1797）鑄造の鐘銘によれば、元禄年間、潮来の北部に小さな庵があつて、人々はこれを談義所とよんでいた。談義所に恵雲と名のる僧がどこからかやってきて滞在し、近在の人々に説教をはじめた。この談義所は藩の政策によつて処分の対象となつたが、妙光寺の目具上人の努力によつて同寺の付属仏舎となつて破却から免れた。

この庵は後日、藩主光圀の命により寺院となり目具上人の号である、徳大と僧恵雲の名をつけ徳大山恵雲寺と呼ぶようになった。

恵雲寺は元禄10年（1697）除地4石1斗8升を得て栄えたが、元文2年（1737）火災にあい撞鐘楼はすべてを焼失した。



しかし60年後の寛政9年(1797)に建物の一部が再興された。この本堂裏手の奥まったところに七面堂というお堂があります。

このお堂は内田山にあった延方郷校の最初に建てられた孔子聖堂のようです。現在二十三夜尊堂として使われている孔子聖堂が建てられた時(1820年)にその前にあった仮聖堂がこの寺に移されたという。

○ 潮来陣屋跡

国道51号線を潮来方面に進み稲荷山の公園を過ぎて「土木事務所入口」という信号がある。

この信号を右に曲れば潮来の水郷地帯中心部に出るが、反対側の左手に入る狭い道がある。そして正面にはこんもりとした小山がある。ここが潮来陣屋跡のある弁天山だ。

残念ながらこの通りの左右はゴミの集積場、処分場となりあまり景観としては良くない。山の麓も捨てられたようなゴミが積み重ねられていた。この山の中腹に弁財天が祀られていて、そこに登る登り口がある。あまり多くの人が訪れてはいないようで、道は石段があるが寂しい。その道の入口付近に碑は建てられている。「潮来鎮台(陣屋)跡 天狗党潮来勢集結の地 潮来弁天山」と書かれている。その隣には「幕府の命により武田耕雲斎指揮のもと、治安沈静を目的に創建されたが、元治甲子の争乱で天狗党の拠点になり、幕府掃討軍によって焼き討ちされた。」と書かれている。

武田耕雲斎は水戸藩の三田(戸田忠太夫、藤田東湖、武田耕雲斎)と称される重鎮で、斉昭死後に水戸藩内の意見対立が激しくなり、藤田小四郎などが天狗党を旗揚げした時にはこれを諫め、早まった行

動を鎮めようとしていました。

しかし、水戸藩にとつて情勢が日々悪くなり、小四郎などから天狗党の党首を懇請されこれを引きうけてしまいます。従って、この潮来陣屋も治安が目的でできたのですが次第に天狗党の人達の集結場にならっていったのでしょう。耕雲斎は、

最後は駿河で小四郎とともに降伏して斬首されましたが、悲惨なのはその家族で、妻、妾、長男とその家族(11歳の娘もいた、次男、六男(9歳)、七男(3歳)などごとく斬首となりました。時代の流れとはいえあまりにもむごいことです。

この多くが靖国神社に合祀されています。

この陣屋は延方郷校や潮来郷校などの水戸学問所には幕末に尊王攘夷をかける急進派の天狗党が集結するようになりました。

これが筑波勢と行動を共にした潮来勢となりました。そしてそこには多くの農民も加わっていました。これを鎮圧するためにこの弁天山に幕府は陣屋を置いたのです。しかし逆にこの陣屋は潮来勢の集結する場にならってしまい、最後は新政府軍による掃討作戦で焼き払われてしまいました。

山道を登るとそこに小さな小屋が置かれています。弁財天のようです。「芸達者 商売繁盛」と書かれた木札が吊るされていました。

潮来の街の方を見ることもできますが、木々に覆われて少し見通しは悪いです。更に山道が続いていたので進んでみました。

少し開けたところに「南無妙法蓮華經」の石碑が立てられていました。天狗党の霊を鎮めるために置かれたものでしょうか。今でも天狗党は悲惨でどこかに亡霊が潜んでいる気がしています。以前玉造でも大宮神社に「天狗党忠魂碑」がありま

した。こちらは玉造勢でした。

小川、玉造、延方(潮来)はそれぞれ水戸藩南領の領域で郷校が置かれていました。

小川、天聖寺跡などでも天狗党が棲みかとしたために焼き討ちされたと聞きました。

○ 素鷲熊野神社

潮来には佐原と同様に江戸と水運でつながり、それによりもたらされたと思われる山車や囃子による祭りがある。潮来祇園祭(8月初めの金土日の3日間)に14台の山車がでる。

また潮来節の発祥の地でもある。潮来の祇園祭はこの素鷲熊野神社(そがくまのじんじや)の祭りで天王祭(津島神社の系統)だ。この神社は素鷲神社と熊野神社が一体となっているが、祀られているのは別々のようだ。

素鷲神社の祭神は須佐之男命(すさのおのみこと)、奇稻田姫命(くしいなだひめのみこと)。

熊野神社の祭神は伊弉諾命(いざなぎのみこと、伊弉册命(いざなみのみこと)、速玉男命(はやたまのおのみこと)、事解男命(ことさかおのみこと)である。いずれも日本神話の神様。

素鷲神社はこの神社の場所が天王山と呼ばれているので、元は天王社(牛頭天王)であろう。

牛頭天王は院殿神様であるが江戸時代は各地にたくさんあり、愛知県の津島神社が総本山であり、元々は神社ではなく寺院とされていた。

神仏分離により仏教的なものが排除されて神社となり、全国の多くの天王社が素鷲神社や八坂神社に名前を変えた。石岡の中町にも中心に天王社があったが八坂神社となり常陸国総社宮に合祀された。この全国の天王社はもともと祇園祭が行な

われていて、八坂神社の祭りと同じであったことも名称変更に抵抗がなかったようだ。そして祭神もほとんどのところがスサノオとクシナダヒメに変わった。スサノオは朝鮮半島から対馬を経由して出雲国にやってきた。今の津島神社はこのスサノオの荒魂が出雲にあり和魂が紀元前245年に

いったん対馬に鎮まった後に西暦540年に愛知県の津島にやってきたとされている。このあたりはどう解釈したらよいかわからないが面白い。この潮来素鷲熊野神社の現地に書かれた由緒によると、「素鷲神社は天安2年(857)潮来町地先浪逆浦より出現。始め辻村天王原に奉祀す。その後文治4年(1185)6月に至り潮来天王川岸地内に祠を営み遷し祀り板久牛頭天王と称し4丁目以西の鎮守となす。元禄5年水戸義公封ない巡視の折町内に在りては火災の憂いあると以て、今の地に遷すべしとの命により別当職佐竹祐宜新たに宮を造営元禄9年(1696)遷宮す。熊野神社は天正年中(1573)1586村人紀州熊野三社を信仰同行の者其の靈験を尊び御分霊を迎え来りて5丁目地内に宮を建て奉斎熊野三社大権現と称し5丁目以東の鎮守として尊崇祭祀せり。元禄5年水戸義公の命により今の地に遷すこととなり、新たに宮を建てて元禄9年素鷲神社と同時に遷宮す。両者共に天保15年(1843)水戸藩内一律に神仏分離の令により牛頭天王を素鷲神社と改称。熊野三社大権現を熊野神社と改称。明治10年(1877)に至り素鷲熊野神社と合名し明治12年4月郷社に昇格せり。」と書かれていました。

入口鳥居のすぐ脇にとても大きな樺の木が聳えています。「茨城県指定文化財 天然記念物 潮来

大樺」と書かれています。樹齢は不明となっていますが推定で500年以上とか800年以上とか説が分かれているようです。かなり見事な巨木です。山の上にある神社の登り口まで鳥居が4つ。途中に古びた石灯籠に狛犬が並んでいくつも置かれています。

上には拝殿とその右側に社務所、左側に額殿や境内社が並んでいます。階段を登ったところにも鳥居がありこちらにも狛犬が置かれています。また拝殿前にもいます。その更に向こう側は中学校が見えます。右手にはもう一つの参道がありそちらが前に紹介した潮来郷校の跡に出ます。この潮来の祇園祭はこの神社の2神(天王さまと熊野さま)を神輿で山を下りて御飯屋に2日間移して御まつります。各町内からの14台の山車が町を練り歩きます。山車は佐原と同じで上は回転しませんので長い棒で回転させます。これを「の字回し」と呼ぶのは佐原と同じです。

○ 普門院

潮来から鹿島に向かうには国道51号線で延方(のぶかた)を通過して北浦に架かる大橋(神宮橋または新神宮橋)を渡っていきます。

神宮橋のすぐ手前の洲崎の交差点手前を左側に入ったあたりに「普門院」というお寺があります。潮来の源頼朝が創建したと伝えられる「長勝寺」の立派な山門(楼門)はこの普門院の門を移築したものだという。庭を通って本堂(地藏堂)のある方に行ってみました。とても驚くほど立派なお堂ですが、現在このお堂に鉄骨で覆って屋根をかぶせ、風雨から守るようにしています。この地藏堂は徳川光圀が潮来村から延方村に移したものだそうで

す。建築年代は天和3年(1683)で、市の紹介記事によると「来迎柱の裏面に朱書きで遊女たち70名の名前が書かれている」とあります。

350年ほど前に建てられたものですのでやはり修理も必要でしょう。何とか早く修繕して立派な姿をよみがえらせてほしいものです。

いまはまだ色彩も残っており、修理も可能な状態です。文化財的な観点から是非昔の姿がよみがえればよいと願っています。さて、この寺は舟に乗った地藏(船越地藏)を本尊としています。本尊の船越地藏菩薩は奥の厨子の中に安置されていて、通常は身代わり地藏を公開しているようです。言い伝えによると鎌倉時代の建長4年(1252)9月15日に高僧「忍性」が鹿島神社に詣で、7日の間衆生済度を物語ったところ「鹿島社の神木の南枝で地藏を刻み、この洲崎普門院に安置すれば、五穀豊穰、国家安泰となるであろう」との神託を受け、忍性が地藏菩薩像を三体作成し、普門院、普渡寺(大船津)、菩薩寺にそれぞれ安置したという。忍性は筑波山の麓の極楽寺に小田氏の庇護のもと滞在して東国の不況につとめました。現在この普門院の地藏尊は舟に乗った姿の地藏で、樺の木の本造りで丈は三尺三寸だという。(かなり傷みも激しいとのこと) (続く)

県指定文化財(12)

兼平智恵子

平成二五年度から工事の始まった新石岡駅は今年二八年三月三十日に完成し式典が行われました。平成三年に完成した石岡ステーションパークの

バスターミナルからの直接駅への通路、そして東口、西口との自由通路が完成し、東西の人の流れが活発になり、街の魅力の向上が期待されています。

そんな中まだ工事が行われているところがあります。

鹿島鉄道株式会社敷地内のバス専用ロータリー広場の整地そして西口広場のタクシー、一般車両乗り入れ広場の整地で二九年三月の完成予定となっているそうです。現在残されている西口広場にある、駅前交番は新石岡駅前（西口）一階催し物スペースの脇に移動になるとの事でした。

その新石岡駅前西口の一階にある催し物スペースには現在は石岡のおまつりでの金丸町の弁天さまと山車そして土橋町の大獅子が展示されています。

この専用スペースはおまつりに関するものばかりでなく、様々な催し物の展示に利用されるとの事でした。ここで現在展示されている金丸町の弁天さまと山車、土橋町の大獅子について復習してみます。（以前、当会報にて紹介しております）

金丸町の弁天さまと山車

大正十一年春のこと、購入先の日本橋魚市場本小田原町所有の弁天さま山車は天下祭り（徳川将軍の上覧をうける祭禮の事）と称された神田明神、山王神社の祭礼に供奉した百台を超える山車の中の一台中で、五日五晩かけて野宿しながら石岡に運んだという、格調高く貴重な文化財となっております。

ちなみに入手した、翌年の大正十二年に発生した関東大震災で百台を超える山車人形がほとんど焼けてしまったそうです。その中で弁天さまと同じ運命で買い取られ難を免れた数台の山車もそれ

ぞれの地で現在も活躍しているそうです。

土橋町の大獅子

制作年代は町内に記録がなく、はっきりわからないようですが伝承によれば宝暦（一七五一～一七六四）頃、町内で世話になっていた渡大工が照光寺本堂の板戸に描かれていた唐獅子をモデルにして制作したもので約三年間を費やして完成し、町を去る時に世話になったお礼として置いて行ったものと伝えられています。どうぞ改めてゆつくりとご覧なさることお勧め致します。

前置きが長くなってしまいました。県指定文化財のご紹介に入ります。

○西光院本堂 有形（建造物）

指定昭和四五・九・二八

吉生地区（旧八郷）の北端に標高三八〇m程の峰寺山があります。土浦方面より朝日トンネルを超え、フルーツライン、そしてフラワーパークを通り過ぎて、少し車を走らせると、ぽっかりと山の中腹に屋根が浮かぶ、「関東の清水寺」と言われている天台宗西光院です……筑波山に沈む夕日の美しい景色から、西方極楽浄土の想いをよせて「西光院」となずけたと言われている。寺伝によると平安時代初期の大同二年（八〇七）、徳一法師の開基と伝えられている。

徳一法師は、藤原仲麻呂（奈良時代の貴族、光明皇后、孝謙天皇に信頼され、太政大臣正一位に進んだが、僧の道鏡が孝謙天皇に重用されるに及んでこれを除こうと挙兵し敗れ、近江で殺された）の第九子として生まれ、四歳で仏門に入り、二十歳の頃には有名な学僧となりました。

本堂は間口と奥行き共に七・六m、総高二十二

mの寄木造りで巖石上に組まれ、脚高は一m余りの懸造（山または崖に、もたせかけ、あるいは川の上にかけて渡して建物を造る）という珍しい建造物になっている。堂内には高さ約十mの自然石があり、その上部には径一mほどの丸石が重なる。それが霊石の馬頭観音として、深く信仰されてきました。

本堂より下を見おろすと緑に抱かれた石岡の美しい大地に引き付けられます。

……間もなく上曽交差点を左に曲がり、じぐざぐな山道を約二十分位登っていく。やがて左側に西光院・ユートピア入口の看板があります。そこから約一〇分くらい車で下って行くことになり、西光院到着となります。参考資料・石岡の歴史と文化

そつとささのべる山吹 登山靴弾む 智恵子

（男体山にて）

ブスの聖地

にわやまゆみこ

バシヤ

バシヤ

バシヤ

バシヤ

バシヤ

ふうう

ぼんっ

ぼんっ

『日本三大ブス』ねえ！

テレビから流れてきた話しを思い出しながら垢を落とした顔をタオルでおさえる。

つるつとサッパリした顔。
しげしげと洗面台の鏡を覗く。

うん。

軽く納得。受け入れるのは得意な方だ。

しかし！

茨城人の美容師としては聞き捨てがならない。
そんなこといったい誰が言い出したのか。など
まうったく興味もないが少しだけ調べた。

名古屋、仙台、そして水戸。

この三都市は名誉なことに『日本三大ブス』の
聖地らしい。

ほう。

水戸で産声をあげた私に言っているのだろうか。

さて、その理由には
殿様が見栄を張るために、美人を全員引き連れ
て江戸に行ってしまった。とか

水戸においては、佐竹公が秋田にお国替えにな
った時、美人を秋田に連れて行った。とか

水戸の御老公は、ブスしか居ない水戸が嫌いで
諸国漫遊に出かけた。とか

武家社会の女は、気が強くて可愛くない。とか
まあ色々笑える説があるようだが、これは絶対
に男が言い出したに違いないに決まっている。

「よその国へ行くから、恥ずかしくないように
美人」だけ連れてゆくぞ。ブスは恥をかくので、

国に残り給え」

と男たちにいわれたとき

「何言ってるんだい。自分の顔もよく見てから
言っとくれ！女は男の『自信』の穴を埋めるお飾
りじゃないのさ！」

というように、昔の茨城女も男に盾突いていた
のだろう。『ブス認定』である。

そして、連れて行かれた女達はきつと優しい賢
い女だ。

連れて行かれた。のではなく、男の仕事がうま
くいくように、ついて行ってやった。のだ。

(どうだい、この包容力！と声が聞こえた)

まったく今も昔も変わらぬイイ女達である。

そもそも『日本の三大ブス』と公共の電波に乗
せられて堂々宣言されても

「はっはっはー！魅力度ランキング最下位の
次は『ブス』だってよ！わかってるな！」と、食
事をしながら踏ん返り返る懐の広さは、なかなか
真似できない。

ブス・ブス・と言う方も言う方だ。小学生の男
子と同じで、本当はそんな女が大好きで仕方がな
い。ちよっかい出して興味を引く。

(素直に可愛いね。って言えばいいのに！)

そして何よりも『イジられキャラ』というのは、
愛されてもいるものだ。

つまり『日本三大ブス』の聖地、名古屋・仙台・
水戸の女は『日本三大愛され女』と言っても過言
ではない！

さあ！常陸国に残りし女達よ。垂れはじめた胸
を張ってゆこう。

パシヤ パシヤ

パシヤ

パシヤ

…

パシヤパシヤパシヤパシヤパシヤ

ほうら

ピカピカじゃないの。

何時もより念入りに化粧水をたたきこんだ顔は、
ニヤリ。と不敵な笑みを浮かべて、鏡の奥の自分
と向かい合った。

そういえば、美肌県ランキングも最下位である。

第二回めの学習会をむかえて

伊東弓子

昔は昔、今は今といわれがちですが、風景も生
活も総て変わった今、百五十年前を況してや三百
五十年前を見ようとしても無理な事です。実証す
るものは当時記された文書からです。それを読む
ことで理解していく糸口が見つかり、その時代が
見えてくるだろうと、文書を読む学習会を立ち上
げました。

文書を読む事は兎に角、敬遠されがちですが、
この機会に関心をもってもらいたいし、又必要だ
と確信しこの一年『水戸藩玉里御留川』の本から
使わせて頂いた四ツを学習の対称にしました。

一つは小漁場に入る高崎、高浜境の文書。次に
三村境の石川文書。それから井関内の八木津の文
書。四ツめは宍倉の三ツ谷に纏わる文書と、歩い

て来た地域の出来事を選んであるのでその復習の時間として今回の学習会を進めていきました。

役員も多くの人が係わるように、一人一文書を担当するように考えてみました。一つの文書を一人が受けもってその人の味が出ると思ったのですが、それぞれの事情があつて断念、残った二人が二つづつ受け持つこととなりました。残念なことでした。

学習会前後の天気は雪が降るという予報がありとても心配でしたが、やはり朝の中は雨とも雪ともつかず降っているのには不安でした。

「誰も来なかったら役員だけでやればいい」

「四〇五人位は来てくれるかな」

いつもの私の悪い癖で口に出してしまいました。

「そんなことはない。二〇三十人は来ますよ」

と、男の人達の励ましに、愚痴を零している自分に恥ずかしさを感じみんなで取り組んでいるのだったと思い直していました。

受付が始まると次々に席が埋まって、総勢二十五人の参加となりました。歩く時の会の参加者、小川の古文書の会の方々、嬉しさに舞い上がっている自分を感じました。

挨拶、他、済んで本文に入りました。先ず担当者が見、その後全員で声を出して読むという形で始まりました。石橋さんは、

「七三 享保十三年（1728）」

御留川笹の内へ舟入れあやまり証文」

「八六 宝暦六年（1756）」

井関村の八木津に高瀬舟掛杣木挽許手形」の二つを文書から漢文調になった字を通して分かり易く読んでくれて、その後、文章をその時代

の解釈で説明し、現代風に説明してくれました。私は、

「三八 正徳元年（1711）」

石川村小獵場連判手形」

「八四 寛延元年（1748）」

実倉村三ツ谷川岸常杭につき指図願」

の二つを受け持ち始まったのですが、自信のなさから上がってしまったので、自信のなさも多く、誤魔化すほどの力もなく助けを求めながら続けました。小川の古文書の方々に大きい声を出して頂くようお願いして、やっと纏ったのです。顔から火が出るようなことはこの事でしうか。

その後質問が二つ、三つあつて「高浜河岸」について即答できないのであとでお知らせする事を約束しました。学習会後、机を口型にしてお茶を頂きながら、自己紹介をしたり顔を合わせながら参加への思いなど話せる機会が出来ました。

歩く会への参加が多かった今回の会場近辺の人々の参加が少なかったのは、関心の違いの表れかもしれないと感じました。

学ぼうとすればいくらでも機会や資料がある事を再認識した時でした。御留川の実態を知ろうとして歩き出した私たちにとって、現代の霞ヶ浦を知る一つの機会となりました。かすみがうら市の郷土資料館で行われていた「折本良平と帆船展」は、江戸、明治から現代へと三方を霞ヶ浦に囲まれて生きてきた人々の生きざまと資源を生産としての生活や歴史を知ることが出来て十二月十二日（土）から三月十三日（日）まで何度か足を運びました。玉里の鈴木家の「御留川」の文書もあつて他の地で見える地元の文書に一人の愛着を思い、友と二人で読んで多少読めたことに満足していた

時間もありました。

一回目の講演会は、一月三十一日（日）「湖・霞ヶ浦を食べよう」という題で、長い活動を通しての霞ヶ浦の魚の様子、変化を岩崎先生から詳しく話して頂いたのですが、後ろの方の二、三人のグループのお喋りには我慢出来ず「静かに」のメモを廻したりする一場面もありました。二回目の講演は、三月七日（日）「霞ヶ浦・魚食文化再興から沿岸地域の活性化」と題し、学芸員の千葉さんの話でした。

関東地方の地形の成り立ち。歴史、現在の状況、全国の川魚を中心にした観光状況。そして今かすみがうら市のすべきことなど熱が入っていました。まだまだ魚も捕れる。加工場もある。魚を利用している店もあると漁場とし現役を感じた思いでした。二回の講演には公魚の佃煮を御馳走になり、規模の違いを感じたりして帰途につきました。歩く会の人達にもこの催しのチラシを配ったものの顔触れには合わず、役員四人の参加だったようです。

学習会が済んで後始末として、当日間に合わなかったもの、高浜川岸についての質問の答えを梅沢さんに調べていただけて届けることが出来ました。が、配り歩く時間の事を考えたら、やはり準備段階での問題に遡ることになり、用意周到に徹するよう心を新たにしていますが、どうなるか心配です。

不安で取り組み乗り出した学習会でしたが、幾つかの良い結果を生み出しました。古文書に関心のある人が声をかけてくれたのです。一寸間をおいて二、三人の話もありました。関心をもっていった人が、言葉に出して問いかけてくれたことが

嬉しく思われます。丁寧に現状を記し、出来れば仲間になつてほしいと願つて知らせました。どうなるでしょうね。

古文書を読むことは、古い字から、古い文章から何を読み取っていくかが大仕事です。それ以上に、その字や文章から現状の生活や地域の活性に、どう繋いでいくかを根底に確りもつて、学んでいく方がいいですね、と小川の古文書の先生が言ってきたことを、忘れかけていた私にとって有難いことでした。先生も日本アルプスの麓で「詰所」にあつた沢山の文書の整理にあたつておられることでしょう。

消えた駅名(2)

小林幸枝

現在の東海村駅は、開業当時は石神駅という名であつた。開業は明治三十一年(1898)で、昭和三十二年(1957)に現在の東海駅に改称されました。

当初の石上駅の名は、そこが当時石神村であつたことから付けられたものであつたが、昭和三十年(1953)の昭和の大合併で村松村と合併し、新たに東海村となり、それに伴つて駅名も東海駅と改称されたのでした。

東海村の由来は、水戸藩の学者藤田東湖の詩の一節にある「卓立する東海浜」からとつたと言います。

石神村と合併した村松村には、村松山虚空蔵堂があり、そこへの参詣客を当て込んで、村松軌道という全長3.8キロ(石神く阿漕)のミニ鉄道が建

設された。鉄道会社の発起人は虚空蔵尊の住職であつた。

中古の蒸気機関車が小さな客車を牽くものだったが、3.8キロの距離を15分もかけて行くものだから、乗客も少なく、大正十五年(1926)に開業したものの昭和八年(1933)に廃止されたという。

石岡にも鹿島に行かない鹿島鉄道がありました。が廃線となつてしまいました。

一つの駅名にもいろいろな歴史が潜んでいて調べてみると思ひぬ話を拾うことが出来て、これも楽しい歴史散歩ではないでしょうか。

【風の談話室】

《読者投稿》

私の国府巡り「讃岐」 京都府精華町 今井 直

おだやかな瀬戸内の風景に包まれながら、車で岡山県側から四国へ向かう。瀬戸大橋を渡りきると、高速道路はおむすびの形をした美しい山に吸い込まれそうになる。標高422m・周囲6kmの飯野山だ。讃岐富士とも呼ばれる。讃岐は父のふるさとで、そのDNAを受け継いでいる私を「お帰り！」と、いつも温かく出迎えてくれる山である。うどん県のほぼ中央に位置し、坂出市と丸亀市にまたがる弧峰で、どこから見ても絵になる。予讃線坂出駅からまっすぐ伸びる道路の突き当たりにドーンと居座る姿や、映画『UDON』のロケ地だった宮池の水面に映る逆さ富士が素敵だ。丸亀城の月見櫓や金刀比羅宮(「こんぴらさん」)か

ら眺める讃岐富士も、思わず写真を撮りたくなるほど美しい。

1時間もあれば登れる手軽さから、ほぼ毎日登頂する人も多いと聞き、私も登ってみた。登山道は道幅も傾斜もゆったりで、子供や高齢者にもやさしいコースだ。ゴミひとつ見当たらないのは、地元の人々にこの山がいかに愛されているかの証しだろう。らせん状に登る途中、四方八方の景色を楽しめる。北には瀬戸大橋が架かる美しい瀬戸内海の島なみ、眼下に讃岐平野の大パノラマが広がる。雨量が少ないために農業用の溜池が多く、まるでパッチワークのようだ。南に目をやれば讃岐山脈、西の方にはやや小ぶりなおむすび型の山がいくつも見える。太古の昔に起きた火山活動による溶岩層が浸食された結果だ。台地状の屋島や五色台はメサ地形と呼ばれ、さらに浸食が進んで平地におむすびが転がって見えるのを、ビュート地形と言うのだそうだ。

ここで私は大変なことをした。デジカメの画像を記録したSDカードを失くしたのである。讃岐国分寺など約250枚の画像が入っていたはずで、私にはとても貴重なものだ。下山して駐車場で紛失に気づいた。山頂で画像がいっぱいになり、カードを入れ換えたところまでは覚えてる。引き返して探したが、小さなカードだから見つかるはずがない。登山管理事務所は不在中で、やっと電話連絡が取れたのは京都に帰ってからだった。該当する遺失物はないと言われ、私は愕然とした。ダメで元々と、念のため丸亀警察署に届け出ると、なんと親切な方が見つけて届けてくださったとのこと。滅入っていた心がカラリと晴れた。カード自体は安いものだが、遊歩道で拾ってくださった

女性は、「きつと旅の思い出が詰まっている」と直感されたそうだ。顔も知らない人の優しさが身に染みて、ひたすら感謝と感激で忘れられない出来事となった。

この件に限らず讃岐の人々が温かいのは、お遍路さんに対する「お接待」という昔からの慣習が、しっかりと根付いていることと関係するかもしれない。弘法大師（空海）が開いた霊場や修行した足跡を辿って巡礼し、八十八ヶ所の札所をすべて踏破すると千四百kmを超えるという。全国からお参りにやってくるお遍路さんに、食べ物や飲み物などを施し、所によっては休息の場まで開放する「お接待」は無償で行われる。日本人の美德のひとつである「おもてなし」が、ごく自然にふるまわれるのだ。

古来、巡礼者が大師ゆかりの寺を参拝した際に、納札を柱に打ちつけたことから、お寺を「札所」、また札所を巡ることを「打つ」という。第1番札所・霊山寺（りょうぜんじ）「鳴門市」から第88番札所・大窪寺（おおくぼじ）「さぬき市」まで、四国を時計回りに巡るのが「順打ち」で、反時計回りなら「逆打ち」。昔から閏年でしかも申年に逆打ちで巡礼すれば、三倍のご利益があると言われている。つまり今年は、逆打ちの巡礼が平年に比べて多くなるそうだ。

実は、お遍路で札所を巡る順番に決まりはない。札所は阿波国に23箇所、土佐国に16箇所、伊予国に26箇所、讃岐国に23箇所あるが、どこから始めても構わない。かつては悩みを抱えた巡礼者が、どこかで倒れてもお大師の下へ行けるようにと、白い死装束に身を包み、鈴を鳴らし祈りながら歩いて、心にひそむ煩悩をとり払い、悟りを開くこ

とが目的だった。近代になって交通が発達すると、信仰的な巡礼からプラスαで観光という新しい一面が付加された。歩き遍路だけでなく自転車や車で、さらにツアーバス遍路も主流になりつつある。

最近はその目的も、健康増進、出世開運、除災招福、学業成就、財運招福、家庭円満、諸芸上達、恋愛成就……と、様々らしい。外国人やお遍路ガールの姿も多く見られ、いわゆる自分探し、パワースポット巡りや癒しとしての巡礼者が増えたといわれる。自分なりのスタイルでお参りできるのがいい。結願したお遍路さんの多くは、弘法大師が眠る高野山「和歌山県」奥之院に報告のお参りをする。

政教分離を盾に靖国参拝に批判的な元首相が、かつてお遍路に出たと騒がれた。やがて9年越しで全札所を回り終えたと、マスコミが派手に伝えた。信教の自由があるのだから、神妙に自身を見つめ直すきっかけを求めてお遍路に出るのもよし。ただ、静かにお参りすればよいものを、記者を引きつれてのパフォーマンスは、元首相なりのスタイルなのか。

律令制の下では、南海道は紀伊から淡路を経由し、阿波・讃岐・伊予・土佐へと続いていた。四国では、後継の国分寺がいずれもお遍路さんの札所で、参拝者が絶えない。阿波国分寺「徳島市国分町」は15番札所、讃岐国分寺「高松市国分町」は80番札所、伊予国分寺「今治市国分」は59番札所、土佐国分寺「南国市国分」は29番札所である。面白いことに、四寺院とも開基が行基菩薩で、天平十三年（741）の創建だ。行基さんも掛け持ちでさぞ忙しかったことだろう。

『続日本紀』の天平勝宝八年（756）の条に、「讃岐を含む二十六か国の国分寺に、灌頂幡（かんじょうのはた）など仏具を頒（わか）ち下し」との記載があり、それまでには讃岐国分寺は完成していたことがわかる。発掘調査の結果、創建当時の寺域は東西220m×南北240mで、築地堀で囲まれていた。遺構は西側半分に集中し、南から南大門・中門・金堂・講堂・僧房が一直線に並び、奈良県明日香村にあった大官大寺式の伽藍配置である。寺域の東側半分は僧たちが農作物を栽培していたのか、礎石も柱跡も見つかっていない。

現在の讃岐国分寺は奈良時代の講堂跡に建っている。鎌倉時代に建立された本堂を支える三十個の礎石は、講堂の礎石を再利用したわけだ。本堂の前に並ぶ三十二個の大きな石が、創建時の金堂の礎石だという。礎石の現状などから、唐招提寺の金堂とほぼ同じ規模だったらしい。松が木陰を作りベンチ代わりに、お遍路さんたちが礎石に腰かけ休んでいる姿がよく見られる。金堂の南東には、創建時の塔の礎石が十五個露出しており、十は四方の七重塔が建っていたと推定されている。

創建当時の遺構はよく残されており、旧境内の全域が国の特別史跡。整備された史跡公園の一角に、縮尺十分の一で復原された石造の伽藍模型が設置されている。石材加工業が盛んな地元の技術により、木造建築の細部まで再現されており、一見の価値がある。国分僧寺で特別史跡に指定されているのは、讃岐以外では常陸国分寺跡と遠江国分寺跡「静岡県磐田市」だけである。

讃岐国府の位置を記した最も古い史料は『和名抄』で、「国府は阿野（あぎ）郡に在り」と書かれている。また仁和二年（886）から四年間、讃岐

守を務めた菅原道真が残した記述も、手がかりのひとつだった。平成二十四年に発掘調査の結果、坂出市府中町で国府跡を確認するに至った。六十八カ所の国府のうち、確認されたのは十七カ所目、四国では初めてである。なお、菅原道真は讃岐国分尼寺を訪れたとき、「法華寺白牡丹」と題する漢詩を詠んだとされ、その碑が国分尼寺の門のわきに建てられている。

四国で唯一の天皇陵が、讃岐国府から目と鼻の先にある。平安末期、皇位継承問題に端を発した保元の乱で敗れ、讃岐に配流となっていた崇徳上皇の白峯陵（しらみねのみささぎ）である。天皇や上皇が配流になるのは非常に珍しく、藤原仲麻呂の乱における淳仁天皇「廢帝」の淡路国配流以来、およそ四百年ぶりの出来事だった。皇位を剥奪され都に戻ることも許されずに、失意の内に四十六歳で崩御した。崇徳院の辞世の歌。

思ひやれ 都はるかに おきつ波

立ちへだてたる 心細さを

崇徳院崩御から三年後、生前から親交のあった西行法師が白峯陵にお参りし、歌を詠んで上皇の霊をなぐさめた。

よしや君 昔の玉の 床とても

かからん後は 何にかはせん

（昔の身分や怨みを忘れて、おだやかに眠りください）

菅原道真・崇徳院・西行はいずれも、小倉百人一首などに名を残す歌詠みの上手であった。崇徳院ゆかりの地・天香山は四国霊場79番札所で、白峯寺（しろみねじ）は81番札所である。

へこんびら舟々 追風（おいて）に帆かけて シ
ユラシユシユシユ 廻れば四国は 讃州那珂郡（
さんしゅうなかの）おり 象頭山（ぞうずさん） 金毘羅

大権現……この唄は調子がいいから、子供の頃にすぐ覚えたが、歌詞が呪文のようで意味も分からず大声で唄っていた。お座敷歌と知ったのはずっと後のことだった。江戸時代から唄われていたらしい。金毘羅参りは伊勢神宮へのおかげ参りに次ぐ庶民の憧れで、広沢虎造の名作『清水次郎長伝』にも、森石松の金毘羅代参が登場する。大坂一丸亀間で金毘羅参詣客を運んでいたのが「こんびら船」、金刀比羅宮は象頭山の中腹に鎮座する。「讃州那珂郡」は讃岐国の国府が置かれた阿野郡の西隣りで、現在の坂出・丸亀・善通寺・琴平・まんのう・多度津・宇多津の地域だ。讃岐うどんの店がひしめき合うエリアである。善通寺で生まれた弘法大師にまつわる伝説はたくさんあるが、うど人も弘法さんが唐より持ち帰り、現在の琴平町に伝授したと言われている。

瀬戸大橋が架かる前、岡山の宇野と四国の高松を結ぶ連絡船があり、船内の立ち食いうどんは絶品だった！コシの強いなめらかな舌ざわり、つるつるッと通る喉越しのよさは、それはそれは美味しく懐かしい思い出の味である。

讃岐では、まだ夜が明けやらぬ早朝6時には、うどん屋が開いていて大勢の人が次から次へとやって来る。冗談とか大袈裟な話ではない。讃岐人はモーニングうどんが大好きなのだ。たいていはセルフで客のマナーもよい。彼らは麺の茹で上がりを待つ間、「釜玉」なら卵をときながら、「おろしぶっかけ」なら大根をすりおろしながら、満面の笑みを浮かべて時を過ごす。薬味のネギがなくなると、表のネギ畑を指さして客にキッチン銚を渡す店主もいるという噂だ。うどん県は本当に不思議！

人気No.1は、谷川米穀店！米穀店だから本業は米屋さんで、営業時間が極端に短い。茹でたての手打ち麺を、冷たい山の水でキュッとひきしめて出される。透きとおる麺の白さがツヤツヤと輝き、見ているだけで思わずだれが出そうになる。ダシつゆが一切なく、ちやぶ台に用意された酢と醤油を、客が自分の好みでかけていただくのである。これが旨い！うどん1玉が七十円、大盛2玉が百四十円だ。そして往復の高速料金が一万七千円！さらにガソリン代が約八千円！……国府巡りをしながら私は、こんな贅沢なうどんを味わっている。

養生日記

「涙ぼろり」

堀江実穂

涙には雨に拭い去られる涙がある
雨が降っても拭い去れない涙もある
悲しみの涙、喜びの涙、幸せの涙、うれし涙、
子供たちに会えない涙もある
弟が毎週作ってくれるパンを食べた時の嬉し涙
喧嘩して失っていた時間があつた友達と握手して
仲直りした時の喜びの涙

映画や音楽を聴いた時の感動の涙

涙を流せるという人の心が私は好き

今日も、明日も私は涙を流すだろう
涙ぼろり

《風の呟き》

「地球の日」

菅原茂美

4月22日は「地球の日」と定められている。環境問題や平和問題について考え直す日とか。ドロドロの人間臭い話の前に、そもそも地球の生い立ちと、生命誕生について考えてみたい。

この宇宙は138億年前のビッグバンにより誕生した。宇宙全体では銀河は1500億個もあり、その一つ「天の川銀河」の中心から^{2.5}万光年程の所で、先代の恒星が老化・爆死し、星間物質を放散。そのガス星雲の収縮により、中心部に原始太陽が誕生し、更に原始円盤が形成され、太陽の近くには岩石惑星、遠くにはガス惑星が形成。惑星の数は8個。地球は太陽から1.5億km（1天文単位）の所に第3惑星として46億年前に誕生した。

太陽は水素の核融合反応で現状の輝度であるが、これから10億年燃え続けると、明るさは10%増し、地球の水は液状では存在できなくなる。水星・金星並みの超高温となる。そのためハビタブルゾーン（生命居住可能域）は地球の外周へと移動し、火星や他の惑星の衛星にでも移住する他ない。自然現象でそうなる前に、人類の浅はかな知恵で温暖化を招き、住みにくい惑星にしたのでは何にもならない。

さてその地球に今からほぼ40億年前、浅い海の底で生命が誕生した。原始生命は単細胞で、中心に生命の設計図であるDNA・RNAを持ち、栄養摂取・成長・増殖などの基本活動をする。恐らくこの1個の細胞が現在の全ての生物の元祖である。単細胞時代は30億年も続き、10億年前、やっと多細胞生物へと進化した。多細胞生物で、雌

雄異体に進化するの動物では哺乳類と鳥類は^{3.2}億年前。植物では被子植物で^{1.9}億年前である。しかし哺乳類のアマミノトゲネズミなどは、Y染色体が退化し、現在「雌性生殖」で繁殖している。人類の雄も、Y染色体がX染色体の10分の1ほどに退化しているので、戦争ばかりしている「雄」を神様が怒り、この世から抹消しつつあるのかな…。

生物に雌雄を生じた理由は、雌雄の区別のなかった多細胞生物の「無性生殖」では、クローンのため遺伝子は全て同じ。何かの病原菌に襲われると、種の全滅を来す恐れがある。生物を雌雄に分け、生殖の時、互いに遺伝子を半分ずつ持ち寄ってシャッフルし、再配分して多様性を持たせれば子孫が生き残る可能性が大となる。誰かが死んでも、誰かが生き残れる。即ち寄生生物を出し抜く戦略に出たという訳。「男と女」の複雑な情念も、元を糾せば種を永続させるための作戦であった。それを考えれば、男が女を殺す（たまにその逆もある）理屈が私にはわからない。折角、男女が強烈に愛し合うホルモンまで進化させたのに…。

生物の進化を辿れば、脊柱のある魚類が出現するのはカンブリア期（^{5.1}億年前）。それ以来、魚類の一部が両生類となつて上陸に成功。更に爬虫類へと進み、^{2.2}億年前、恒温の哺乳類へと進化し、8000万年前にサル目誕生。その中から6500万年前に霊長類が誕生。その中から、3種のチンパンジーの中の1種が、我ら人類なのである。チンパンジーと人類の遺伝子は、98・6%同じである。ボノボは温厚であるが、人類とチンパンジーはかなり獰猛である。

*

さてこの地球に寄生した「人類」というモンスターであるが、余りにも向こう見ずの無鉄砲。身の回りに毒を撒き散らし、ケンカの道具は先鋭化し、地球の未来など考えない、今の今、自分たちだけ便利で楽しめればそれでよい。「現在の地球は未来の子孫からの預かりもの」という言葉は、これまで何度も紹介してきたが、資源を枯渇させ、環境を破壊し、絶滅危惧種のみ増え続ける。超利己主義の塊である。おまけにこの地球という揺り籠から零れ落ちそうな異常繁殖ぶり。現在の地球人口は73億人。毎年8500万人ずつ増えている。他の生物種を絶滅させても自分だけ生き残ればそれでよいとする傍若無人ぶり。昔から乱暴して権力を勝ち取った者に、永遠に栄えた試しはない。国連とやらができて、かなりの年数を重ねた。

しかし世界平和にいかほど貢献している事やら…。尤も武器を売って富を得ている大国が存在するのだから、簡単に平和など訪れるわけもない。それに対抗し、核だ、ミサイルだと、軍事強化の亡霊に取りつかれているヘンチクリンな国もある。超強力な国連軍を創生し、世界のもめ事を解決できれば、各国はそれぞれに軍備費など持たずに済む。その金で教育や福祉・医療を潤おせば、もっと人間らしい高度の文明を築けるのではないかと常日頃考えている。

しかし人類は、愚か者だけで満たされているわけではない。幾多の賢人がこれまで、偉大なる文明を築いてきた。その明かりを消さず、世界がなお一層、平和創生のために、全知全能を傾け、邁進すれば、ユートピアも訪れようというもの。「地球の日」を大切に、叡智を傾けて、立て直しを図りたいもの。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第四・(三)

平家物語は巻第五から平家の横暴が頂天に達すると共に、対抗勢力として源氏が芽を吹き出す。大まかに言えば「戦記文学」としての平家物語が本来の姿になる訳で、是までのように優雅な場面は少なくなり、合戦場面も増えてくる。

今回の分は巻第四を全部入れたため、少し長くすることを御了承頂いて源三位頼政が敢行した「平家に対する謀反」の後始末を収録した。個人的な愚痴であるが平家物語は面白い話なのに合戦と言うと僧兵が**出しゃばつて**くるのが気に入らないけれども、平家を倒す切っ掛けをつくったのは僧兵らしいので我慢をしない。辞書では「僧兵は、武装した僧として特定の集団が存在した訳では無く、各寺院の衆徒が必要に応じて武装決起したもの」としているから、本来の目的は主に諸国国司などが寺院の領地などを侵犯するのを防ぐ自警団のような存在なのであろうけれども「過ぎたるは」とか「で昆虫でも数が多ければ迷惑な害虫に変わるし、余計な事を言えば現代の政治も多数決が民意の全てだと錯覚して独裁化する弊害が起きることになるから、ぜひ平家物語を政治に生かして欲しい」と思っている。

原始仏教では仏陀（ぶつだ）が説いた、とされる次のことを正しく生きる聖典に挙げている。

- ・「諸悪莫作（しよあくまくさ）すべて悪しきことを為さず」
- ・「衆善奉行（しゆぜんぶぎよう）善きことを行い」
- ・「自淨其意（じじようい）自己の心を浄め」
- ・「是諸仏教（ぜしよぶつきよう）是が諸の仏の教えである」

確かに其の通りではあろうが、社会が複雑化してくると一つ一つの出来事について正確に善悪を区別することが難しくなってくる。前章段で興福寺の僧兵が園城寺に送った書簡の中に触れているが「武家の塵芥（ちんがい）」と悪口を言われていた平氏でも、次第に権力を持つようになると自分が神仏になったようなつもりで罰当たりな行動を繰り返すようになるのは仕方の無いことなのか。

皮肉な事に平家の発展に比例して僧兵も力を付けていったようで極言すれば一時的ではあるが大寺院と藤原氏と平氏が三大勢力であった。しかし源三位頼政が決起する約五か月前に、平清盛は後白河法皇に近い公卿を勝手に罷免していたから藤原氏は麦藁（むぎわら）程度に暴落した。残る二大勢力が平家と大寺院の僧兵になる訳で、源三位頼政は「平家打倒」という大きな賭けに僧兵の力を期待したのである。しかし僧兵は大寺院に寄生する僧侶であるから、その寺の政治的意向に行動が左右される訳で平家寄りが多い。登下校する小学生の列が急に横断歩道を渡るように、予告も無く旗を揚げた知名度の低い源氏に対しては力を貸してくれる僧兵（寺院）も多くないのである。

其れに加えて「南都牒状」に在るように平清盛が大勢力の比叡山に米や衣類などを多量に配ったから「蟻の甘きにつく如く」評判が良くないとは言っても物を呉れる側に味方が増えるのは当然であり、有力寺院の僧兵は得な組を選んだ。

三井寺に籠った高倉宮以仁王、源三位頼政以下の反平家軍は、それ程の兵力が無い。奈良興福寺の僧兵を当てにしていたのであるが、最初は期待できそうであった奈良勢も、時間が経つにつれて信用出来なくなってくる。折角の反平家行動も準備不足で先

行き不安が大きい出発となった。

永僉議（ながのせんぎ）のこと

治承四年からだ丁度、四百年後になる天正十八年に豊臣秀吉が小田原城を囲んだ。城内では和睦が決戦かで重臣たちの意見が纏まらず長時間の会議を続けていたので、それが「小田原評定」などと呼ばれて時間浪費の代表のように言われているけれども、其れ迄は此の章段のタイトルにあるように平家の大軍と戦う作戦の為に、敵の襲来を目前にして源氏軍と僧兵とが三井寺で開いていた会議が「長い（其の割には効果の無い）会議」の代表であつたらしい。審議されたその内容は次のようなものであつた。

「比叡山の僧兵が平家側に付き奈良は来ると言つて来ない。これ以上、時間が経つては合戦の時機を失する。（援軍は当てにならない）此の状況では六波羅（平家本陣）に奇襲をかけるしか無いであろう。その場合は健康保険のように老人と壮年層と二手に分けて、高齢組は如意が峰から敵の背面に向かい、歩兵部隊四、五百人で賀茂川東岸白川の一带に在る民家に火を付ける。すると平家側で京都警備に当たる武士たちが「敵の襲来」と慌てて其の場に駆け付ける。其の時に途中の坂や如意が峰入口付近で待ち伏せするように馬を駆って攻めかかれれば暫く時間稼ぎが出来る。其の間に軍の正面は伊豆守仲綱を大将として元氣旺盛な僧兵たちが六波羅に押し寄せて風上から平家屋敷に火を掛け、一気に攻めれば如何に太政入道（清盛）でも焼かれて戦死するであろう。」というもので消防署が聞いたら激怒するような内容である。作戦としては単純な戦法だが、此の案に基づいて

役割分担などを決めれば良い。ところが何しろ急に起きた事件であるから集まった軍勢の中には平家に志を通わす者も居たのである。その一人である一如坊の阿闍梨真海（いちによぼうのあじやりんかい）阿闍梨は教授格の僧が弟子や同じ僧坊に居る僧ら十数人を連れて会議に出ていたのだが、次のように異議を唱えた。

「この様に申せば平家に味方するように思われてしまうが、たとい、そうだとしても三井寺衆徒の義理を破つたり、自分の名を惜しむようなことはしない。昔は源氏、平家が競い合つて朝廷を守護していたけれども、近年は源氏の運が傾き、平家が世に出て二十余年、平家の天下に靡なびかぬ者は居ない。平家屋敷は充分な軍備があるから先ほど提案の有つた方法でも少数の兵力で攻めることは無理がある。此処は充分に作戦を練り、慎重な計画を立ててから後日に押し寄せても良いのでは有るまいか。」

真海にしてみれば理屈はどうでも良くて、平家館が敵の襲撃に対応出来る時間を稼ぐのが目的であるから他にもあれこれと言ひ立て、かなりの時間を無駄にした。其のうちに乗田房の阿闍梨慶秀という八十歳近い僧が真海の長説法に飽きて、というより、真海の狙いに気がついて、群衆の中から前に出て来た。此の人は法衣の下に簡単な鎧を着け、大きめの合戦用太刀を差し、覆面をして白い柄の大長刀を杖に突きながら堂々と次のように言い放つた。

「小勢でも合戦に勝てる例は他の山に証拠を求めまでも無い。我らが暮らす三井寺創建の願主である大海人皇子（天武天皇）は未だ東宮（天智天皇の皇太子）の時に大友皇子（天智天皇の子）に対する配慮から吉野山中に身を隠された。大和国宇多郡を過ぎた際には、僅か十七騎しか居なかつた軍勢も伊賀名張から伊勢

を越え桑名に出てから美濃・尾張勢を味方に付けて遂に大友皇子を滅ぼし皇位に即かれた。（六七二年、壬申の乱）

窮鳥懷に入り人倫これを憐れむという文章がある。一般には「窮鳥懷に入れば、獵師も之を獲らず（きゆうちようぶところこにいればりようしもこれをとらず）」と言われている。他人は知らず、我が慶秀一門は（長々と無駄な論議などしていないで）今夜のうちに六波羅平家屋敷に押し寄せて討死をしよう！いざ、進め！」と言ひ放つた。

是に同調した園城寺門跡の一つである京都市内の円満院住職・大輔源覚という僧が進み出て「黙つて聞いていれば無駄な論議が多い。此のままで夜が明けてしまふぞ。何よりも敵に向かつて進撃しよう！」と叫んだ。（原文は是で終り、此の後の動きは次の章段に移るのである）

大衆揃（だいしゅうぞろぞろ）のこと

永僉議で時間を浪費したけれども、ようやく動き出した反平家軍は、搦手（からめて）裏（うら）から攻め込む予定の高齢者軍団（主力は老僧兵）が源三位入道頼政を大將軍として、乗田坊阿闍梨慶秀（じようえんぼうのあじやりんかい）律成坊阿闍理日胤（りつじようぼうのあじやりにちいん）この人物は源頼朝に従つた千葉氏一族とする、帥法印禅智（そつほういんぜんち）この人は歌人・藤原俊成の弟とする、そして善智の弟子である義宝、禅坊をはじめ其の勢一千余、彼らは手に手に松明（たいまつ）を翳（かざ）して予定通りに如意が峰に向かうことになった。

一方、大手に向かう軍勢は若手組であり、大將軍

には頼政の嫡子・伊豆守仲綱が当たり、弟の源大夫判官兼綱、六条藏人仲家、其の子・藏人太郎仲光が従つて、大衆（僧兵）では円満院の大輔源覚、成喜院の荒土佐、律成坊伊賀公、法輪院の鬼佐渡などという凄（すご）い名前の連中が居て彼らは名前に負けない力持ちであり、武器を持つて戦つても鬼や軍神に負けない自信があつて俗に言う「一騎当千のつわもの」揃（ぞろ）であつた。

三井寺の中に在る平等院では因幡堅者荒大夫（いなばのりつしやあらだゆゑ、角六郎坊、島の阿闍梨、さらに筒井谷の法師では卿阿闍理（きようのあじやり）、悪少納言、さらに北院では金光院の六天狗とか式部、大輔、能登、加賀、佐渡、備後など、松井の肥後、証南院の筑後、賀屋の筑前、大矢の俊長、五智院の但馬、そして六十人いた乗田坊の阿闍理慶秀と同坊からは加賀光乗、刑部春秀（平将門を討つた藤原秀郷の末裔）らが加わり寺院で雑役に従事する小者たちには参加を強要しなかつたよう一来法師だけが加わつた。下級の僧侶たちでは筒井の淨妙明秀、小蔵尊月・尊永・慈恵・榮住とか腕力に優れた玄栄などが加わり、また武士では渡邊省（わたなべのはぶく）、播磨次郎、授薩摩兵衛（さくさつまのひようゑ、長七唱（ちようしちとなう）、競瀧口（きおのたきぐち）、与右馬允（あとうまのじよう）、統源太（つづくのげんた）、清・勸（すすむ）を先として、その勢は都合千五百余人が勇ましく三井寺から出陣したのである。余計な心配だが、合戦に向かうのに主力が坊さんで武士が少ない。

「先んずれば人を制す」源平時代の合戦は一番乗りが名誉とされたけれども今回の場合には平家屋敷を急襲することが勝利の必須条件であつた。ところが三井寺に集まつた反平家軍は前章段で平家方内通者による「永僉議」に遭つて時間を浪費した上に、

以仁王が到着された後は防御の為に三井寺に来る街道に柵を置いたり周囲に堀を掘ったり橋を掛けたりと、必要以上に土木工事に時間を取られてしまっただけで先制攻撃のチャンスを失ったようである。役に立たない宮様などは放って置いて平家屋敷を急襲していれば勝てたかも知れない。原文には「時刻押し移って関地（関所の鶏鳴き合えり）」とあるが関所の鶏だけが鳴いた訳では無く、目覚めの悪い鶏でも鳴き出すほど夜が明けてしまった、ということである。大手に向かう予定であった伊豆守が「此処で鶏に鳴かれては（夜明けになつては）六波羅の平家本陣に着くのが昼になる。どうしようか？」

と言え、園満院大輔源覚が前章段のように進み出て「昔、中国で秦の昭王時代（最初の統一王朝を開いた秦の始皇帝より五、六十年前？紀元前三百年代・春秋戦国時代）に孟嘗君田嬰（もうしょうくんでない！）の国王の甥が部下三千人と共に人質として秦国に囚われていた。しかし危険を察して王妃に珍しい白狐の衿巻を贈り脱走を見逃して貰って関所の函谷関（かんこくかん）まで来たけれども、この関所は朝に一番鶏が鳴かないと開かない。其の時に三千人の部下（客分の者）の中に田甲と言う者が居て、是が物真似を得意としていたので、此の者を関所の裏手に回して鶏の声をさせた。すると麓の集落の鶏が目覚めて一斉に鳴き出したため、関所の番人が木戸を開け、一行は無事に敵国から脱出することが出来た。それを考えると、既に夜が明けたように鶏が京都方面で鳴くのは（こちらを騙す）平家の作戦かもしれないから、構わずに押し寄せよう」と言った。

しかし間もなく本当に夜が明けてきたので伊豆守が「夜討ちならば勝ち目はあったのだが、明るくなつてからでは不利である。出発した軍勢を呼び戻

せ！」と命じたので搦め手の者たちを如意が峰の辺りから呼び返した。勇んで出陣仕掛けた者たちは「是は一如坊の阿闍梨真海が永僉議を企んだ所為で夜が明けてしまったのだ。奴らの僧坊をぶち壊せ！」といきまいて押し掛けた。この騒動で真海側の数十人が討たれ、一如坊真海はやつとの思いで平家屋敷に逃げ込み涙ながらに事情を訴えたけれども、平家方には数万の軍勢が集まっても誰一人として話を聞いてくれる者が居なかった。僧兵に対して警戒していたのであろう。

五月二十三日の明け方になつて、高倉宮以仁王は「どうも此の寺院の兵力だけでは敵に叶わないであろう。比叡山の協力は得られず、興福寺は救援に駆け付けない。是は日を置くほど状況が悪くなるであろう」と自分では何も出来ないのに三井寺を見限つて奈良へ逃げることにした。以仁王は「蟬折」と「小枝」という高級な中国渡来の二本の笛を持っていた。蟬折は鳥羽法皇時代に宋の皇帝に黄金千両を贈り、そのお礼として送られて来た蟬の様な節のある笛材で出来ている。貴重な竹材なので三井寺の高僧・大進覚宗に命じて加持祈祷の上に作らせた笛である。或る時に以仁王の乳母の子の叔父である藤原実衡が参上して笛を借りて、膝より下に置いたので笛が怒つて蟬の部分が折れた。その為に「蟬折」と名付けられ笛が上手であった以仁王が貰った、と言うのが負けて逃げるという時に笛の話の聞いてもしようがない。どうせ口にするなら元氣が出るように飴が良い。

以仁王は覚悟をしたようで、笛を三井寺の金堂に居ます弥勒菩薩（本尊）に備えた。自分の最後を覚り、あの世で御仏に会った際に幾らかでも印象を良くして貰おうとしたのであろうか。思えば気の毒な

ことである。それから老僧を集めて暇を与え（自分にはついて来ないように言い含めて三井寺に留め）若い僧の中から何人かの供を指名された。源三位入道は一族家臣を引き連れて行くことになり其の勢は千人程とみられた。乗田坊阿闍梨慶秀は老人用の鳩杖にすがりながら以仁王の前に歩み出て、涙を流しながら言った。「何時までもお供をしたいのですが、既に八十歳を過ぎましたので足腰が弱りお供が叶いません。代わりに弟子の刑部（ぎょうぶ）坊俊秀を行かせます。此の者は、去る平治の合戦で故・左馬頭義朝（さまのかみよしとも）頼朝の父の軍勢に属し六条河原で討死をした相模国の住人・山内須藤（首藤）刑部丞俊道の子です。（源氏系武士の子です）少し縁がありましたので私が親代わりで幼少の頃から育てて参りました。信頼が出来る者ですから、何処までもお供をさせて下さい！」

以仁王は感激して「今までに格別の恩義を与えた訳でも無いのに、ここまで尽くしてくれるのは有難いことである」と、乗田坊に深く感謝をし、涙を流しておられた。（緊急の場合であるから涙など流していいので早く逃げろ！）

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会&ことば座 10 周年記念公演

ギター文化館発 常世の国の恋物語百 第 36 話

里山の風に恋歌の舞う

6月18日(土)・19日(日) ギター文化館(開場14:30 開演15:00)

ふるさと風の会10周年記念公演 朗読詩劇・市川紀行作「未来に託す詩」 朗読・白井啓治

ふる里とは

物語の降る里



振り返れば われらが七十年
それはいつも何かに
守られていた歲月
そうだ
掲げた理想が
傷つきながら
時に危うさを帯びながら
権力を縛り
立憲のつこうべを凜と立て
そうだ
理想の旗ははためいていた
日本の奇跡 憲法九条の旗が
歴史に「もしも」はない
もしもはいつも悔いと
願望に満ちている
それは「もしも」の選択が
権力の保身の意志に従うからだ

ことば座10周年記念公演(常世の国の恋物語百・第36話)

白井啓治作「里山の風に恋歌の舞う」 手話舞・小林幸枝 朗読・白井啓治

札幌つむぎびと・友情出演

斎藤隆介作「花さき山」 朗読・熊谷敬子

パンフルート・横地竹笛太郎



風は幸せの言葉
風は温もりの揺りかご
風は光の景をつくる
さあ
風に包まれて蝶になろう
そして
風に包まれて
揺れる波に踊ろう



やさしいことをすれば
花が咲く
いのちをかけてすれば
山がうまれる
うそではない
ほんとうのことだ

ふるさと風の会 10 周年記念展 (10時～2時30分 入場無料)



ふるさとルネサンス講座の受講生2名と講師が中心となって、会報「ふるさと風」を発行し、この5月で満10年となりました。兄妹会のことば座の第29回定期公演にあわせて「ふるさと風の会歩典」を開催いたします。会員の書きためて来た小文を集めた文庫の展示・即売会をはじめ、風の会の分科会として、兼平智恵子が開いている「風の言葉絵教室」の作品を展示いたします。また、伊東弓子を中心となって玉里御留川を歩く会の「御留川を紹介する資料」の展示なども行います。皆様のお越しをお待ちいたしております。



※ことば座定期公演のチケットはギター文化館で取り扱っております。ギター文化館(0299-46-2457)

※ふるさと風の会展のお問い合わせは、打田昇三(0299-22-4400) 兼平智恵子(0299-26-7178)まで。